

キャンパスの樹木

| collection 3 |

ゲ ッ ケ イ ジ ユ



新島遺品庫横のゲッケイジュ

ゲッケイジュ（月桂樹）は、クスノキ科の常緑高木。別称はローレル。原産地は地中海沿岸および西アジアで、日本には明治末に渡来し、記念樹や庭木として多く植えられている。高さは7〜20メートル、花期は4〜5月、雌雄異株で淡横色の気品のある花が咲く。葉には芳香があり、料理の香味料としてなじみ深いだけでなく、油や薬もとれる。

この木が日本で愛好され普及したのは、その美しさと有益性のみでなく、ギリシャ神話にちなむ霊木、競技勝利者を讃える木としてのブラズイメージが大きく影響していると思われる。「月桂冠（桂冠）」や「桂冠詩人」という言葉がそれを示している。ちなみにこの木の花言葉は「栄光 勝利」である。ところで、わが今出川キャンパスでも戦前から大学および女子部を問わず

ゲッケイジュは記念樹木や寄贈樹木として多く植えられた。たとえば記念植樹では、同志社創立50周年（1925年）記念でのクラーク記念館前のラーネッド博士と海老名弾正総長等によるものがよく知られている。また寄贈植樹としては、「新島遺品庫」の周辺に植樹されたものが注目される。これはわが学園の多くの植樹の中でもっとも美しい事例であると思われる。

新島遺品庫は大学と女子部あわせた今出川校地のほぼ中央に位置する。そこには新島先生の遺品をはじめ貴重な関係資料が多数所蔵されている。日ごろ目立たない小さな建物であるが、ここはいわば同志社精神の中心であり源泉である。この建物が建てられたのは戦局厳しい1942（昭和17）年11月のことで、当時新島関係資料の散逸を防ぐために保存施設の建設が待望され

ていた。この時、建築費を献納したのが池田庄太郎氏（大正5年同志社普通学校卒、会社重役、同志社頌栄会会員、昭和53年逝去）であった。この池田氏が、ふたたび1969（昭和44）年1月にゲッケイジュ10本と遺品庫保存のために多額の寄付をされた。この時にゲッケイジュは遺品庫を囲むように植樹されたが、現在残っているのは残念ながら3本のみである。池田氏は遺品庫を「月桂冠」で美しく飾り、風雪から保護したかったのであろう。彼の名は遺品庫前壁と木の側石柱に刻まれている。

池田氏の親友で新島研究の第一人者であった森中章光氏は、池田氏を「同志社精神をしっかりとつかみ取った男子」と評し、遺品庫についても「君の献納した遺品庫はダイヤモンドのように光輝を放っている」と追悼の辞に述

べた。今日なおゲッケイジュは池田氏の愛校心に応え、遺品庫を静かに見守っている。

（元大学社会学部教授 宇治郷毅^{うじこう ぎ}）

（参考文献：「月桂樹の寄贈」『同志社時報』34号 昭和44年3月、森中章光「大仙池田庄太郎君」（上）（下）『The Doshisha Times』昭和53年11月、12月、本井康博「ゲッケイジュ（キャンパスの樹々 一六）」『同志社時報』117号 平成16年3月、植物文化研究会編『図説花と樹の事典』柏書房 平成17年）